BOOK IX — 自由の代償

第03章 — 機密指定された存在

01 — 灰色のコートの男

医師には、刺激を与えてから随意反応が始まるまでの時間を測定するよう指示が出されていた。灰色のコートを着た男には、何を求められているのか理解するまで待つよう指示が出されていた。

その晩、三度目も、機器は医師の予想より早い反応を記録した。

「合図を予測したのですか？」と彼女は尋ねた。

「いいえ」

彼女は記録を調べた。最初の動作は合図の後に起きていたが、前世代の装置を用いた試験のときよりはるかに早かった。彼女は別の時計を使って基準計測器を点検した。

誤差はなかった。

男は上体を起こした。検査のためにコートを脱いでいた。首の付け根には古い手術痕のような細い跡があったが、それ以外には、彼が製造された存在であることを示す明らかな特徴は見当たらなかった。

「もう行ってもいいですか？」

「まだ終わっていません」

男は不平を言うこともなく、再び横になった。

陸軍の大尉が研究室に入り、変更された検査日程を医師に差し出した。彼女は最後のページに目を通し、それから診察台の男を見た。

「持続的な身体出力の評価が含まれています。前回の評価の後、どれだけ回復期間を置くべきか、まだ決めていません」

「回復期間は変更されました」

「誰が？」

大尉はページ下部の承認欄を指し示した。ヴェン将軍の執務室が変更を承認していた。

医師は男に痛みがあるかと尋ねた。男はないと答えた。彼女は検査を続けたいと思うかと尋ねた。

男は大尉の方を見た。

「指示は受けています」

「私が聞いているのは、そういうことではありません」

しばらく、二人の男はどちらも答えなかった。診察台の上で換気扇の回転が遅くなった。医師は、男がこの部屋に入ってからほとんど物音を立てていなかったことに気づいた。

彼女は、彼の返答をそのまま記録した。

大尉は日程表を封筒に戻した。立ち去る前に、記録は評価との関連性について審査されることになると彼女に告げた。

目の前に座る男のうち、どれほどの部分が評価に関係すると見なされるのだろうか。彼女はそう思った。

02 — 受領記録

翌朝、病院ではレイチェルが最初の一時間を、軍の当初の受領記録を探すことに費やしていた。公開資料保管庫は依然として閲覧を拒んでいたが、市の調達部門が保有する旧契約一覧に、その参照番号が見つかった。

一覧には機器の説明はなかった。しかし、納入を受け入れた機関は明記されていた。

エイドリアン・タイレルが彼女の肩越しにのぞき込んだ。

「研究機関の名称じゃないな」

「軍の医療部門に所属していた組織よ。その部署はずっと前に閉鎖されているわ」

彼はその項目をもう一度読んだ。契約は、ハヴェルの研究ノートに記されたものとよく似た規格の材料を供給するためのものだった。納入先には、納入後に加えた技術的改良を保持する権限が与えられていた。民間の資料保管庫には、その改良の記録がなかった。

レイチェルはその項目を印刷し、前日に回収した複写資料の脇に置いた。

日付から分かるのは、当初の寿命延長計画の中止が公表される前に、誰かが軍を通じてその材料を利用できるようになっていたということだけだった。それが何に使われたのかまでは分からなかった。

「つまり、計画の中止は、私たちが考えていたほどの意味を持たなかったのね」

「この材料に限っていえば、そうかもしれない。研究が続けられたかどうかは、まだ分からない」

ロイは窓の近くに座り、固定具の上から袖のボタンを留めようとしていた。布地が留め具に引っかかり、彼は左手でそれを外した。

「ハヴェルは、なぜ俺たちに百年も生きてほしくなかったのか、教えてくれた。彼らが恐れていたのが技術そのものだとは言わなかった」

エイドリアンは印刷した紙の二つの項目の間に線を引いた。

「政府はある場所で技術を禁止し、別の場所ではその技術に資金を投じることもできる。だからといって、両方で同じことをしているとは限らない」

ロイは紙を見つめた。

「つまり、誰に未来を持つことを許すのか、決めることができた人間がいたということだ」

レイチェルは出典と日付を添えて、印刷した資料をファイルに収めた。実験の結論には何も変更を加えなかった。

古い契約書の末尾、発行機関の下には、別の納入区分への参照が記されていた。

その区分は、アルファベット一文字で表されていた。

その定義は見つからなかった。

03 — 異なる基準

軍の別棟の地下に再現された街路には、住民はいなかった。店の窓は交換可能なパネルでできており、扉の向こうには配管もない部屋があった。管理された条件下で演習を繰り返せるように設計された場所だった。

デレン大尉は観察室から、部隊の六人が朝の評価を終えるのを見守っていた。彼らは七年間、ともに訓練を受けてきた。うち二人は、民政当局が道路の支配を失った地区で任務に就いた経験があった。全員が人間だった。

軍は多くの時間と資金を費やし、通信が途絶えたとき、想定していた状況が変わったとき、そして与えられた命令が不完全なときにも、彼らが任務を遂行できるよう訓練していた。デレンは最後の能力を誇りに思っていた。

観察室の下で扉が開いた。灰色のコートを着ていた男が、ありふれた訓練服姿で再現街路に入ってきた。

デレンは男の名前を知らされていなかった。

「彼も我々の部隊に加わるのですか？」と軍曹が尋ねた。

「彼は別個に評価される。我々は観察するだけだ」

最初の演習は、意図的に床を不安定にした部屋から、重りをつけた物体を回収するものだった。デレンは、男が警告表示が消えるまで待つものと思っていた。だが男は部屋を横切り、支

持枠が崩れ始めたところで物体を受け止め、表示が変わらないうちにそれを持って戻ってきた。

その背後で支持枠が床に激突した。

観察室では誰も口を開かなかった。

デレンは再生映像を見た。派手な動きもなければ、力を誇示しようとする様子もなかった。男はただ、デレン自身の身体では間に合わない時点で、物体に手を伸ばしていた。

若い兵士の一人が、軍は自分たちを置き換えるつもりなのかと尋ねた。

「そのつもりなら」とデレンは言った。「我々をここに連れてきて見せたりはしないだろう」

彼は自分の言葉が真実であってほしいと思った。

モニターのそばにいた担当官が結果を記録した。次の演習は説明のないまま中止された。男は重りのついた物体を台に戻し、誰かが行き先を指示するのを待った。

デレンは、誰も男を称賛しなかったことに気づいた。

04 — 住所のない名前

暫定評議会では、ハヴェルの死後検査に立ち会った裁判所の立会人が、自分の机にもう一通の封筒が置かれているのを見つけた。政府の医療施設の事務職員の筆跡だった。添え状はなかった。

中には、数か月前にその施設を経由した遺体に関する搬送許可書の写しが入っていた。許可書には氏名ではなく軍務上の識別名が記載されていた。軍医の署名と、すでに公開名簿には存在しない部署の副署があった。

独立登録簿には、該当する死亡記録がなかった。

立会人は市民登録局に照会を行った。その回答によれば、その識別名は同局の管轄内の市民を特定するものではないという。どの機関が死亡を登録する責任を負うのかと尋ねると、システムは彼女を許可書の発行元に差し戻した。

彼女は病院のイマニに電話した。

「通常の登録簿では身元を確認できない患者を受け入れたことはありますか？」

「もちろんです。まず患者を治療します」

「政府のある部署が、その人物は患者ではなかったと主張した場合はどうなりますか？」

イマニは事情を説明してほしいと言った。

レイチェルが評議会の建物に着く頃には、立会人は文書の写しを独立した管理下に置いていた。真正性はまだ確認する必要があった。文書を提供した事務職員には二度連絡を試みたが、返答はなかった。

レイチェルは受け入れ先の機関を調べた。搬送先は、つい最近ロイの検査記録を求める照会が回されたのと同じ医療別棟だった。

「誰が亡くなったのかは、これでは分からないわ」

「ええ」

「その人が製造された存在だったかどうかも」

「ええ。でも、死を認めない制度を通じて遺体が移送されたことは分かります」

レイチェルは、目録査察官が病院に現れたときのセナの恐怖を思い出した。彼女には名前があり、ベッドがあり、医師がいて、処置を拒否する権利があった。その一つひとつが、誰かが主張することによって初めて守られてきたものだった。

彼女は立会人に、公開用の写しから事務職員の筆跡を除くよう頼んだ。

封筒を送り届けるために、すでに誰かが相当な危険を冒していた。

05 — 民間に同等の存在なし

正午少し前、ヴェン将軍のもとに前夜の医学的評価と朝の演習の結果が届いた。報告書には、公開記録のある何世代かのレプリカントとの比較が含まれていた。ロイの現在の推定能力は、別のページに記されていた。

彼女はその数値を戦闘の結果の予測と取り違えはしなかった。結果は異なる条件で得られたものであり、ロイに関する情報の多くは不完全だった。それでも、確保作戦の評価が前提としていた想定を変更するには十分な比較だった。

「何人を投入できる？」と彼女は文官の局長に尋ねた。

「医療部門が投入可能な人員を確認しています。他にも任務がありますので」

「聞いているのは訓練済みの人員だ。保管中の個体の数ではない」

局長は、この計画の機密指定により、その全戦力をこの会議で明かすことは許されていないと説明した。

ヴェンは報告書を閉じた。

「では、人数は言わなくていい。私が見たあの一人以外にも、人員を見込んで作戦を立てられるのか、答えてくれ」

「はい」

デレン大尉が部屋に呼ばれた。彼は男を兵器と呼ぶことなく演習の内容を説明した。責任者が、人間の兵士たちは男とともに作戦行動を取れるのかと尋ねると、デレンは、その男への命令がどのような条件で変更されるのか理解するまでは答えられないと述べた。

「彼には指揮系統がある」と局長は答えた。

「我々にもあります。同じ指揮系統なのかを知る必要があります」

ヴェンは合同評価を承認した。ロイとの接触は許可しなかった。

デレンが退室した後、彼女は投入候補の人員について医療記録を要求した。局長はその代わりに、任務適性証明書を提示した。

「彼らの想定服務期間は？」

「それは別の機密区分です」

会議が始まって以来初めて、ヴェンは資料ではなく、彼の顔をまっすぐに見た。

「彼らを生還させる責任が私にあるなら、彼らの健康状態も私の責任だ」

局長は投入前に補足評価を提供することに同意した。

彼女の質問には答えなかった。

06 — 空のベッド

ロイは、負傷した肩の定期検査を受けるため、イマニと診療室に行くことに同意していた。右腕は前夜よりも広い範囲で動かせるようになっていたが、重いものを持とうとするとまだ痛んだ。

イマニは改善を記録し、だからといって腕を制限なしに使ってよいわけではないと念を押した。

「君はいつも、何をしてはいけないかばかり言うな」

「そう言わなきゃいけない理由を、あなたがいつも作るからよ」

彼女が固定具を調整している間、ロイは隣室に空のベッドがあることに気づいた。その下には段ボール箱があり、朝に退院した患者の持ち物が入っていた。その日のうちに係員が、患者の新しい住まいに箱を届けることになっていた。

ロイは、ある人物が消えているにもかかわらず、その人物に関連する物品の所在だけは一つ残らず記録されていたファイルを思い出した。

彼はイマニに、国防事務局が自分の移送命令を提示したらどうなるのかと尋ねた。

「法的根拠を示すよう求めるわ」

「兵士を連れてきたら？」

彼女は留め具を調整する手を止めた。

「私には兵士はいないわ」

守れない約束を彼女がしなかったことを、ロイはありがたいと思った。

数分後、レイチェルが立会人の資料を持ってやって来た。軍の別棟を経由して移送された遺体について分かっていることと、不確かなままのことを説明した。ロイは、亡くなった者は初期のレプリカントの一人だったのかと尋ねた。

それを知る方法はなかった。

「まだ生きている誰かが見つかるかもしれない」と彼は言った。

「見つかったら、その人が本当に見つけられることを望んでいるのか、聞かなきゃね」

彼はその言葉を考えた。第二の人生の多くを、答えを隠しておく理由があるかもしれない人々に、答えを求めて過ごしてきたのだ。

イマニの検査が終わると、彼は立ち上がり、コートを着た。廊下で、介助を受けずに歩くセナとすれ違った。彼女は足を止め、体調は良くなったのかと尋ねた。

彼は良くなったと答えた。

今のところ、それは本当だった。

07 — 非公開審理

午後遅く、独立評議会は搬送許可書に記載された死亡事案の管轄を確定するため、非公開の審理を開いた。医療施設は文書の通し番号を確認したものの、氏名や診療記録の提供を拒んだ。施設の代表者は、関係する軍の適用除外規定により、市民の死亡証明書が存在しないことは合法であると主張した。

立会人はその適用除外規定を提示するよう求めた。

代表者は、通常の民間の手続きでは審査できないものだと述べた。

レイチェルは研究グループを代表して出席していた。回収された寿命延長計画の資料に、同じ機関への参照が含まれていたからだ。彼女は二つの記録を評議会に提示し、その適用除外が人の製造にも及ぶのかと尋ねた。

代表者は法律顧問に相談した。二人の会話は一分も続かなかった。

「国防上の許可に基づき生産された人員は、民間の製造登録簿には登録されません」と彼は答えた。

部屋は静まり返った。

評議会の法務担当者は、軍務を目的としたレプリカントについて述べているのか、明確にするよう求めた。

「はい」

レイチェルはすぐには次の質問をしなかった。その言葉が条件を付けられたり、説明によって打ち消されたりすることなく、記録に残ることを望んだ。

法務担当者は、六年の制限がその人員にも適用されるのかと尋ねた。

今度は代表者が回答を拒否した。

EDENは回答拒否を議事録に記録した。録音は評議会の証拠保全封印の下に置かれ、立会人には閲覧制限付きの写しが許可された。死者の法的地位は未解決のままだった。新たに得られた情報が立証したのは、軍の区分の存在であって、文書に記された個人の身元ではなかった。

会議室の外では、法務担当者が次の審理を手配する間、レイチェルが窓のそばに立っていた。はるか下では、ありふれた市バスが政府の建物の脇に停車し、雨の中に乗客を降ろしていた。

岡京には、市の記録を調べても数えることのできない人々がいた。そのうちの何人かは、意図的に記録から除外されていたのだと、今では彼女にも分かっていた。

自分が記録に存在していないと知っている者は、どれほどいるのだろうか。

08 — 許可された人員

その晩、ロイとレイチェルは病院の向かいにある小さなレストランに座っていた。そこで彼女は、評議会の審理で認められた事実を彼に話した。

ロイは口を挟まずに聞いていた。彼女が話し終えると、飲みかけのコーヒーに映る天井灯を見下ろした。

「つまり、ほかにもいるのか」

「ええ。何人かは分からないけど」

「どれだけ生きるのかも分からないんだな」

「ええ」

かつてロイは戦争のために造られた。命令が疑いようのないものとして与えられたこと、その先にある人生を想像することがどれほど難しかったかを覚えていた。政府の新たな人員の仕様を知らなくても、彼らの存在が何を意味するのか、理解することはできた。

「彼らには、俺たちにあった選択の機会すら一度も与えられていないのかもしれない」と彼は言った。

レイチェルはカップを脇へよけた。

「私たちと同じものを望んでいると決めつけてもいけないわ」

外では軍の輸送車が店の前を通り過ぎた。窓の一つから灰色のコートを着た男が見えた。ロイが顔を向けたときには、車両はすでに通り過ぎていた。後を追う理由もなければ、中に誰がいたのかを知る方法もなかった。

街の別の場所では、デレン大尉が作戦説明室に入っていた。朝の演習を終えた男がテーブルの片側に座っていた。その隣には、同じ灰色のコートを着た二人が座っていた。デレンには、会議の開始を待つ将校たちのように見えた。

彼らの前にはそれぞれ開かれたファイルが置かれていた。三冊とも、同じ写真が入っていた。

ロイ・バッティが左手に容器を持ち、北部の給水所から歩いて出ていく姿だった。元大臣の死が発表される前に撮影された映像から切り出された画像だった。

デレンは自分のファイルを開いた。最初のページには、作戦の目的が評価であると記されていた。二ページ目には、確保任務へ移行する可能性が記載されていた。最後のページには署名がなかった。

灰色のコートを着た将校の一人が、写真の人物はこの手続きについて知っているのかと尋ねた。

「この手続きについては、知らない」とデレンは答えた。

将校はファイルを閉じた。

ロイが同行を拒んだらどうなるのか、誰も尋ねなかった。

それを決めるのは、署名のないページだった。

第03章 終。